自治労連
# 自治体の仲間
1995年4月5日 第203号
有料機関紙・毎月2回5・20日発行 1部20円
日本自治体労働組合総連合

昭和59年11月5日 第三種郵便物認可
第203号（1995年4月5日）
発行人 小林洋二
編集者 「自治体の仲間」編集委員会
〒112 東京都文京区大塚4丁目10－7 ☎(03)5978-3580 ファックス(03)5978-3588 郵便振替口座 東京00140-6-160259
本紙の購読料は組合費に含まれています。

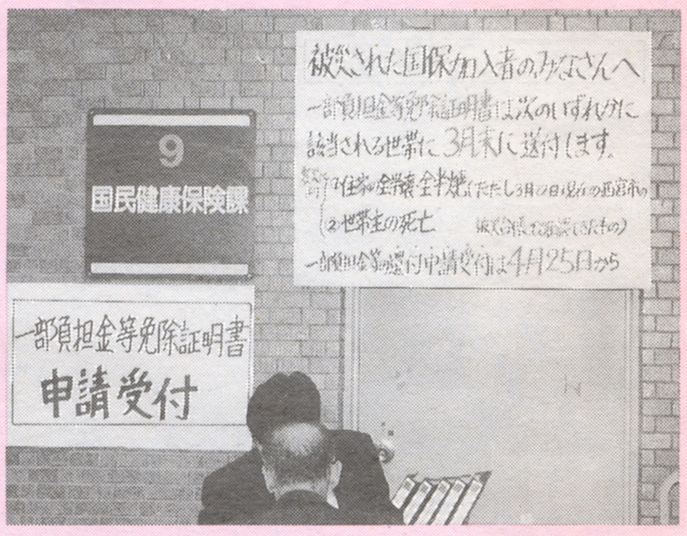
自治体ウオッチング

### 高校球児のあこがれ甲子園のある町

兵庫県の東南部に位置し、高校球児のあこがれの甲子園のある町。古くから〝えべっさん〟で知られる西宮神社の門前町として栄え、天保11年の〝宮水〟発見以来、清酒醸造の生産地として名声を得ている。

## 阪神大震災から70日

# 地方自治の値打ち今こそ
# 住民本位の復興に全力



災害減免・免除の受付に追われる国保課

1時間以上の待ちにも市民は冷静です

給食再開までの間、救援業務に就くことで日額を保障させて救援にがんばる嘱託調理員組合員のみなさん

## 西宮市職労の仲間たちは、いま

今なお七千人以上の住民が避難所生活を強いられる西宮市。行政の重点は、命を救うことから人間らしいくらしの実現へと移っています。西宮市職労の仲間は市民と行政との板ばさみに悩みながらも、住民本位の復興をと激務に耐えながらがんばっています。

### 窓口は疲れがちの市民で長蛇の列

大阪から神戸方面に向かう電車の中は高校野球の応援団で賑わい、駅前に降り立つと、震災後、人の心を締め付けるように鳴り続けた救急サイレンはもう聞こえません。そこには普段着姿の活気が戻っているようでした。

ところが一歩西宮市役所の庁舎に入ると様相は一変します。被災者証明や義援金の窓口は長蛇の列、戸籍や住民異動、国民健康保険の窓口も市民であふれ、「一時間待ち」の立て札の出る通路で疲れがちの市民が静かに並んでいます。復興にはまだまだの感が強まります。

浜崎 委員長

阿江 執行委員

### 仮設住宅申し込みに追いつかない供給

国民健康保険課の広田さんは「国の災害減免の政策判断が遅く事務が遅れがちです。ケースによって考えないといけないことも多いのですが、量をこなすことに追われてしまいます。震災後は連日の超勤で土日もほとんどが出勤でした。しんどくても被災者の減免の希望にはしっかり応えたい」と疲れを押して職務に励んでいます。

西宮市職労の浜崎委員長は「震災後七〇日経つのに七千人以上の市民が避難所での生活を余儀なくされています。命を救い、食を確保する救済から、今は住を供給する段階に来ています。しかし仮設住宅は一万五千の申し込みに対して五千戸程度しか建設できていません。このままでは社会的弱者はますます追いやられてしまいます」と苦い思いをのべます。

### 住み慣れた地での住の確保こそ大切

浜崎さんは、自らも住宅部で激務にあたっています。「国や県の措置を待っていてはダメです。市長は市民に対してなにをするのかはっきりさせるべきです。いまこそ地方自治の値打ちをはっきり示すときです」

執行委員の阿江さんは「救済から復興に向かう過程では、日常からの自治研活動とそれにもとづく住民共闘の蓄積が大切だとつくづく思いました」と日常的な取り組みの強化を強調します。

こうした認識を踏まえて市職労は、三月に入ってからは当局に対して政策的な要求を強めています。

仮設住宅に関しては「市民生活の安定のためにはなによりも住み慣れた地での住居の確保が大事」と「以前より居住していた個人の所有地や借地に、公費で個人用の仮設住宅の建設を行う」よう申し入れています。

### 市民不在の復興より合意と理解の形式に

また、「被災市街地復興推進地域」の指定にともない、市民の意思を抑え込む形で「復興」が強行されそうな事態に対して、「長期間の生活に耐える質のよい仮設住宅に地区の被災者住民全員を収容できる施策を確立し」「地区住民の不安や焦りを解消した上で復興計画の合意と理解を形成する」よう主張しています。

### 労働条件の改善も堂々と要求する

もちろん組合員の労働条件も大切にしています。

「要求自粛は連合の専売特許。私たちは堂々と要求すべきは要求し、超過勤務手当は全額確保、職員の休息宿泊場所や特別休暇も措置させました」と阿江さんは当たり前のように言います。

復興に貢献できることに誇りを持って奮闘する西宮市職労の仲間たちは、今、輝いています。

退職予定者34名中24名が参加。「組合に入っていてよかった」のメッセージも寄せられた送る夕べ。救援活動を通じてさらに団結が強まりました(三月二十三日)